

群 教 セ	F09 - 01
	平16.224集

# 生徒の活動に働きかける 「ほっとルーム」の展開

— 「ほっとルーム」を拠点とした  
ピア・サポーターの育成を通して —

特別研修員 中村 泰彦（小野上村立小野上中学校）

## 《研究の概要》

本研究は、生徒の学校生活を学習・生活・部活動ととらえなおし、その中に悩みやつまづきがあると考え、「ほっとルーム」を拠点に学習・生活・部活動に働きかけを行うことにより、温かい人間関係を築き不登校の予防を図っていくという研究である。働きかけの部分にピア・サポートトレーニングを取り入れることにより、思いやりの心、助け合う心を養い、より充実した学校生活を送れるのではないかと考えた。

【キーワード：ほっとルーム 働きかけ ピア・サポート 学校教育目標】

## 学校の教育課題

本校は1年生24名、2年生20名、3年生21名の単学級からなる小規模校である。小規模校であるがゆえに生徒に関しても比較的目が届きやすく、非行や不登校といった問題は少ない。しかし、一方で表面に問題行動を出さない分、内面にいろいろな不満や不安、悩みを抱えている生徒も多数いると思われる。その内面の問題に関わっていくことにより、非行・不登校の予防、開発的な取組を行っていかなければならない。

### 1 学習の取組に関わる課題

- 本校は生徒の学習へ取り組む姿勢が意欲的である。（学級の雰囲気調査から）平均偏差値も高い。（年度当初実施したNRTテストから）それゆえ、自分の不得意な教科に対して大きな劣等感を感じている生徒もいる。個別指導を充実させなければならない。
- 各教科とも表現能力が低い。特にコミュニケーション能力、自己表現能力が低い。（校内研修の話し合いから）校内研修のテーマ「豊かな表現力を高める指導」各教科で実践研究を行っていく。

### 2 生活に関わる課題

- 幼稚園からの単学級なので1度もクラス替えを経験していない。それゆえ、人間関係の固定化が目立つ。同じグループで行動することが多い。また、同じグループ以外の友達と行動するときは自分を出さない生徒が多い。いろいろな人と関わる場面を設定したり、関係づくりのトレーニングをしなければならない。
- リーダーが存在しづらい雰囲気がある。友達と違う立場になることに消極的な生徒が多い。
- 学校教育目標の中の「思いやりのある生徒」「自他ともに大切に生きる生徒」「広い心と友情を育む生徒」という目標を意識して学校生活を送っている生徒が少ない。（学校評価アンケートから）学校全体で目標を意識、行動する風土づくりをしなければならない。

### 3 部活動に関わる課題

- 本校は部活動数が少なく（男子・女子各2クラブ）自分の適性にあった部活動を選ぶことができない。仕方がなく部活動に入った生徒の技術指導や人間関係づくりの支援をしていかなければならない。
- 他学年の部員とうまくコミュニケーションをとることができず、同じ学年同士で固まって行動したがる。異学年間の信頼関係づくりをしなければならない。  
以上のような本校の実態を踏まえ、課題を解決するための方策を「ほっとルーム」に関連させて良い方向に持っていくと同時に不登校の予防について考えていく。

### 研究の問い

生徒の悩みの原因を大きく「学習上の悩み」「生活上の悩み（人間関係の悩み）」「部活動上の悩み」ととらえるのが適当ではないかと考える。昼休みや部活動の様子を見ていると、いつも同じグループで行動している。また人間関係のトラブルがあると長引く傾向にある。どうして話せる友達を増やそうとしないのだろうか。なぜ誰とでも話し合える雰囲気ができないのだろうかという疑問を持った。そこで、生徒の学習・生活・部活動において「ほっとルーム」が働きかけることにより、悩みを未然に防止し、円滑な相互コミュニケーションが図れるようにする。その働きかけのモデルを作ることにより、学校目標の具現化を行っていくことは不登校を予防することに有効であるか研究し、検証していく。

### 課題解決のキーワードの設定

#### 1 学校の教育課題の解決に向けて

##### (1) 「ほっとルーム」の基本的な考え方

本校の3つの課題を解決するための中心機関として「ほっとルーム」を設定する。従来の相談室としての機能を中心として考えると、悩み事がある生徒が相談をするために来室する、または不登校傾向の生徒がその部屋に在室し活動するという受動的な使われ方が多いと考える。そうなると特別な部屋であるという認識が先行し、入りにくい空間になってしまう。「ほっとルーム」を生徒が「ほっ」とできる空間としてとらえる。生徒が「ほっ」とできる空間とは、居て安心できる空間、居場所のある空間、自分の意見などが受け入れられる空間、他人の意見を受け入れられる空間であると考え。そのような空間を作り出すために生徒の活動に「働きかけて」いく中心の機能として、部屋としての「ほっとルーム」を位置付ける。学級、生徒会活動、部活動を「ほっ」とできる空間になるように働きかけることにより、学校全体に生徒それぞれが居場所のある、安心して活動できる雰囲気、風土ができれば学校目標の具現化につながり、ひいては不登校の予防になるであろうと考える。

##### (2) 「ほっとルーム」を能動的に

生徒が学校生活を送っていく上で3つの柱をあげるとすれば 学習活動 生徒会活動（学校行事の活動も含む） 部活動になると考える。

の学習活動においては、わからない問題や課題、勉強方法などの悩みやつまずきを解決、個別指導をしていく必要がある。そこでつまずきのある生徒に対して教科の教員やその教科が得意な生徒が支援していくという体制作りを行う。その学習支援を行うチームの編成を「ほっとルーム」担当が行う。また、校内研修などで各教科の教員にも協力してもらい、授業の中でもピア・サポートトレーニングなどを行える工夫をする。そのことにより、話し合いやすい雰囲気を作り、互いに教え合う姿勢をつける。（働きかけ）

の生徒会活動では高原学校や職場体験学習、体育大会などの学校行事を通して、それぞれのリーダーにピア・サポートトレーニングを行い、支援活動を行う。(働きかけ)

の部活動では各部の部長にピア・サポートトレーニングを行い、各部活動の異学年における助け合い活動を実践する。(働きかけ)

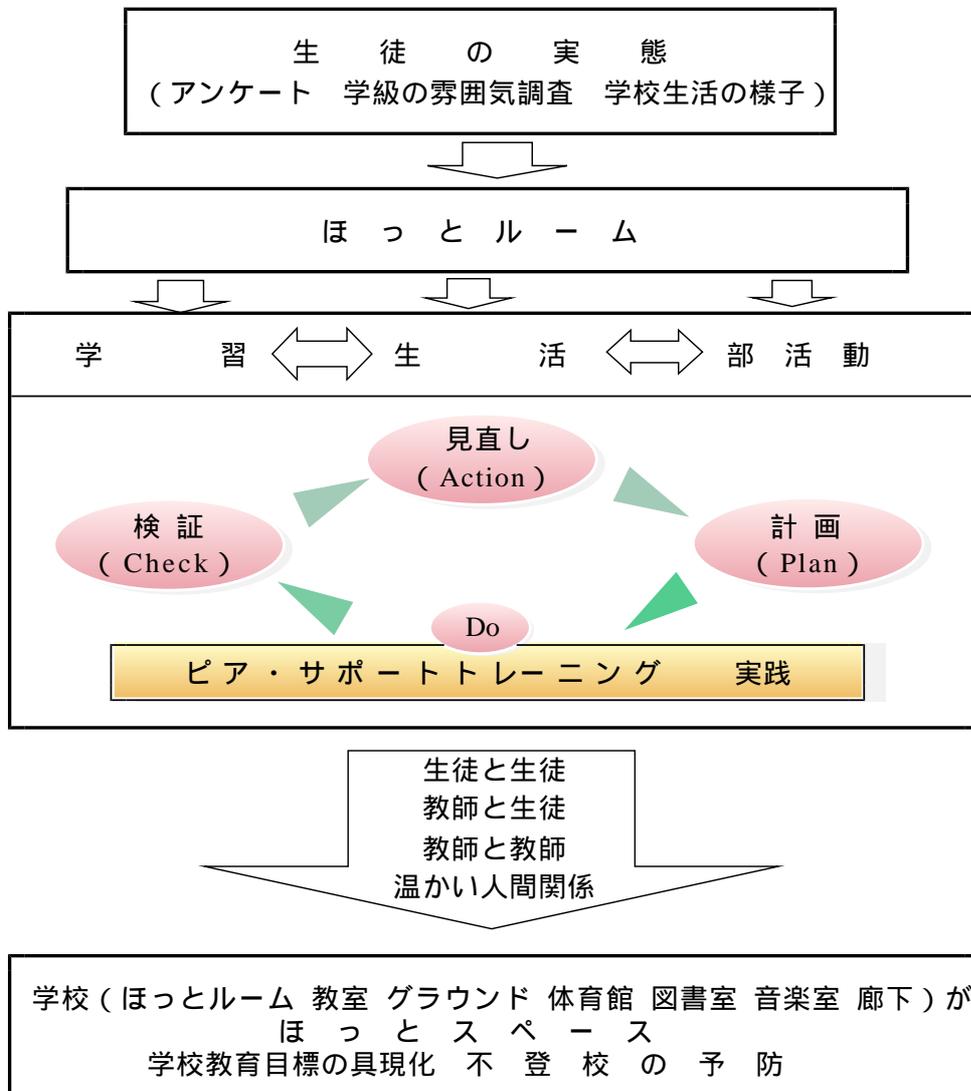
以上の3つの働きかけを実践することにより、受身でない、より積極的な「ほっとルーム」の運営を目指す。

(3) なぜピア・サポートか

本校では昨年度からピア・サポート活動に取り組んでいる。そのためピア・サポート活動を行う下地はできているということが言える。そして昨年度の活動を生かして活動を展開していく。生徒が他の人を思いやることを学ぶための方法のひとつとしてピア・サポートを行っていく。思いやりを持って活動することは、豊かな心を育み、学校教育目標の具現化につながっていくであろうと考える。

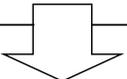
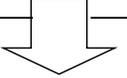
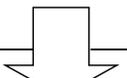
また、高原学校におけるピア・サポート活動では群馬県総合教育センターの不登校問題課題解決支援資料の中の支援4「不登校児合同体験学習(キャンプ体験)」を参考に行っていく。その中の不登校の予防に生かすモデルを活動に生かしていく。

(4) 研究の構想図



実践

1 学習に関する働きかけ（働きかけ）

学 習 に 対 す る 課 題	
学習に関する悩み ○わからない ○勉強するのがいやだ ○眠くなる ○勉強方法がわからない ○苦手科目がある ○発言や発表が苦手、恥ずかしい、人に何かを言われるのがいやだ	
	
計 画 ( P l a n )	
学習に対して悩みのある生徒やつまずきのある生徒に対して、生徒同士の教え合い活動をする事によって、悩みやつまずきを解消していく。また生徒同士のコミュニケーション能力を高めていく。 教師が授業の中にピア・サポートを取り入れることによって、人との接し方を考えさせたり発言、発表を温かく受け入れられる雰囲気をつくる。	
	
実 践 ( D o )	
1 学習状況の遅れている生徒、悩みのある生徒のピックアップ(3名 教科 国語) 2 教科が得意な生徒の募集(4名 特に成績にはこだわらない) 3 教師が生徒のチーム編成、予定作成 4 教える側の生徒にピア・サポートトレーニング(傾聴訓練 コミュニケーション、聞く態度、ノン・バーバル) 5 学習会の実施 期間 11月～12月の毎週水曜日(部活動なしの日)の昼休み 40分×5回 場所 ほっとルーム 学習会 教師が用意した教材を教わる側の生徒が解いていき、つまずいたところを教える側の生徒が手助けする。教師は巡視を行いそれぞれのグループに助言を行う。	1 校内研修による課題の把握「豊かな表現力を高める指導」 2 授業中の様子を見取り 発言は活発であるが、一部の生徒にかたよっている。発表を恥ずかしがる生徒もいる。 3 学級活動の時間にピア・サポートトレーニング(トラスト・ウォーク、じゃんけんゲーム、あいさつゲーム)2時間 4 実践授業(国語) 題材「お年寄りと一緒に俳句を作ろう」 日時 11月25日(木) 場所 小野上村総合福祉センター 内容 生徒とお年寄りを3つのグループに分け、それぞれのグループで話をしながら俳句を作り、作品を発表し合う。
	
検 証 ( C h e c k )	
○12月に行われた期末テストではそれぞれ3点～10点点数が上がった。 ○教わる側の生徒の感想 ・先生に質問するのは緊張するが、友達同士なら気軽に聞ける。	学級内での特に授業中での人の発言に対する受け入れの雰囲気がよくなった。 ○人の意見に対するやゆがなくなった。(特に男女間で) ○実践授業の感想(生徒・お年寄り)

<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の教科でもやってほしい。</li> <li>○教える側の生徒の感想</li> <li>・自分で解くより、教えるのは難しい。</li> <li>・自分の勉強にもなる。</li> <li>○教師の気づき</li> <li>・授業よりものびのび学習活動をしている。</li> <li>・ほどよい緊張感とリラックスは学習効果を上げると思われる。</li> <li>・日程調整が大変（他の活動との重複）</li> <li>・生徒が教えるというよりは共に学んでいくという姿勢で行ったほうがよかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめは緊張したけれど、お年寄りにいろいろな話を聞いて楽しかった。</li> <li>・あまり話ができなかった。</li> <li>・久しぶりに孫と話ができてよかった。</li> <li>○実践授業の感想（教師）</li> <li>・学校内でのコミュニケーション能力が学校外の場面でも使えるかが大切である。</li> <li>・人に見てもらうことで表現力は高まるのではないか。（俳句の作品の出来具合、発表の仕方から）</li> </ul>
---	---



見 直 し ( A c t i o n )

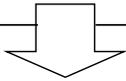
○今回はともに自分の担当である国語で実施したが、生徒のニーズは数学や英語の方が多い。他の教科担当の教師とも連携し、5教科で実施できるようなシステム・スケジュールを考えていく。また「ほっとルーム」だけでは場所が足りないなので、あらゆる場所を利用しなければならない。

○中学校では担任だけでなく、それぞれの教科担当が授業をする。ピア・サポート、教育相談についての研修を校内研修等を利用して組織で行えば、更に効果が上がると考える。そのための計画作りに今年度中から着手し、次年度から実行できるようにする。

2 生活に関する働きかけ（働きかけ）

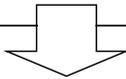
<p>生 活 に 対 す る 課 題</p>
<p>生活に関する課題 ○人間関係の固定化 ○自分を出さない生徒が多い ○リーダーが存在しづらい ○学校教育目標を意識して生活している生徒が少ない</p>
<p>計 画 ( P l a n )</p>
<p>人間関係の固定化の緩和、リーダーの育成、思いやりのある生徒の育成を学校行事を通して行っていく。特に「不登校問題課題解決支援資料」の中のキャンプ体験を参考に、高原学校を実施し、その体験活動の中でより幅広く豊かな人間関係を作っていく。更に体育大会や音楽祭の練習、百人一首大会など他の行事にもつなげていく。</p>
<p>実 践 ( D o )</p>
<ol style="list-style-type: none"> <li>1 教師の組織作り 教頭、養護教諭、1年担当（2名）2年担当（2名）計6名で係別に分担、その際支援資料を参考にして係活動を行ってもらえるように勉強会を実施。</li> <li>2 生徒の組織作り 5つの係（班）に分かれ、班長を選出。実行委員として活動する。</li> <li>3 実行委員にピア・サポートトレーニング ピア・サポート活動の理解、傾聴訓練（聞く態度、ノン・バーバル）、相手を尊重した頼み方、トラストウォーク</li> <li>4 高原学校 登山、キャンプファイヤー、カッター訓練、食事、清掃などの体験の中で</li> </ol>

楽しむ中にも、どれだけ助け合う活動ができたかを反省会、班長会議で意識させる。  
 5 高原学校の反省 実行委員に高原学校でピア・サポートトレーニングが有効だった点  
 生かせなかった点などを振り返らせる。



検 証 ( C h e c k )

- 実行委員の感想
  - ・係の仕事は大変であったが、登山のときに班の人に声をかけられた。
  - ・食事のときに班の人たちが協力してくれたのでうれしかった。
  - ・係の仕事が大変で他の人のことまで気がまわらなかった。
- 生徒の感想
  - ・高原学校はとても楽しかった。一番楽しいのは友達とたくさん話せたことです。
  - ・普段話さない友達とも仲良くなった。実行委員の人もよく話しかけてくれた。
  - ・高原学校は楽しかったが、大勢の部屋で寝るのはいやだ。
- 他の教師の感想
  - ・高原学校にピア・サポートを取り入れるのはよい試みだと思う。学級もまとまったように思う。しかし、準備だけでも大変なのに、他の活動も組み入れるのは時間が足りない。
- 教師の気づき
  - ・実行委員をリーダーとして育成するのに、ピア・サポートトレーニングは有効であった。  
 (他の生徒によく声をかけていた。他人のことまで目が向くようになった。)
  - ・思いやりの心を持つには自分にゆとりのある心を持つことが必要である。  
 (仕事があてばきとできる生徒はよく他人にも声をかけられていたが、仕事で手一杯の生徒もいた。)
  - ・他の教員にもピア・サポートについての共通理解を図っておいたことは、高原学校を実施するにあたって、各仕事をスムーズに行うことに有効であった。



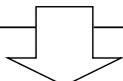
見 直 し ( A c t i o n )

- 高原学校では多数の生徒が充実感を得て活動できた。次年度以降も続けられるような記録を残しておく。
- 高原学校で学んだことが、学校の日常生活になるとやはり意識が薄れてしまった。体験活動で学習したことをどのように日常生活に結び付けていくか考えていく。
- 体育大会や音楽祭の練習でも同様の手順で行ったが、学級のまとまりには有効であったが、時間的な制限をクリアする方策を考えていく必要がある。

3 部活動に関する働きかけ (働きかけ )

部 活 動 に 対 す る 課 題

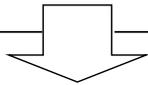
- 自分のやりたい競技が選べない。(男女各2部しかない) ○疲れる。
- 人間関係のトラブルがよくある。 ○先輩との関係が難しい。



計 画 ( P l a n )

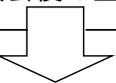
人間関係のトラブルを緩和するために、部活動の中でピア・サポートトレーニングを行

う。7月に行われる総体、9月に行われる新人大会時の2回にわたって実施する。同学年だけではなく、異学年との助け合いの心、支えあう心も養っていく。（女子ソフトテニス部）



### 実践 (D o)

- 1 部長（1名）副部長（2名）に対し「ほっとルーム」にてピア・サポートトレーニングを実施。（部長、副部長は3年生 聞く態度、相手を尊重する頼み方、互いを尊重した断り方）
- 2 部員全体にリレーション作り（1年5名、2年7名、3年4名 自己理解・他者理解・話の聴き方）友達集め、ほめほめシャワー、聞くと聴くを実施
- 3 練習、大会などでの見取り
- 4 大会後の生徒の振り返り



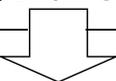
### 検証 (C h e c k)

#### ○生徒の感想

- ・自分でわかっていなかった良い所がわかってよかった。
- ・先輩（後輩）からこう思われていたんだということがわかって安心した。
- ・厳しさがなくなってしまった気がする。（大会敗戦後）

#### ○教師の気づき

- ・毎日接しているのでもっとお互いのことがわかっていると思っていたが、意外にわかり合っていなかった。
- ・部活動には競技としてもっと勝ちたい生徒、仲間との活動を重視する生徒、なんとなく活動している生徒が混在している。



### 見直し (A c t i o n)

- 毎日接しているからこそ、気持ちの変化も起こりやすい。定期的にはかもこまめにこのような活動をしていく。
- 他の部活動にもピア・サポートを取り入れていく方策をたてる。

### 研究のまとめと今後の課題（研究者の学び）

「ほっとルーム」から3つの働きかけを行い、そこにピア・サポートを取り入れたことは、生徒の人間関係の円滑化に有効であったと思う。ピア・サポートトレーニングにより積極的に友達以外の生徒同士で話す機会が多くなってきた。また、学び合い、助け合って行動する場面が多く見られた。人と人がコミュニケーション活動をするときに大切なのは、きっかけなのではないだろうか。あまり話さないということは、話すきっかけがないということではないかと感じた。そこを支援していく教師の関わりが重要である。その意味でピア・サポートは人間関係作りのきっかけになり、生徒同士話し合う、伝え合う力をつけるのに非常に有効であった。このことは、生徒の生活に限ったことではなく授業にもあてはまる。各教科でも伝え合う力というのは重要視されている。ピア・サポートトレーニングを、伝え合う力をつけるための1つの手段として活用する。そこで生まれた学力のゆとり・心のゆとりが「思いやりのある生徒」

「自他ともに大切に生きる生徒」「広い心と友情を育む生徒」という学校教育目標の達成に近づいてゆく道筋なのではないかと感じた。

また、今回の研究で生徒観、指導観が変わったと思う。学級活動や部活動などで毎日接している生徒の意外な一面を見つけたり、本音を聞く機会が増えた。そこで、人を見る目というものはいかに自分の思い込みが大きいかということを感じた。このような教師の自己理解が生徒の悩みを解決するスタートなのではないだろうか。関わることで理解できるということは、生徒同士、教師と生徒間でも同様であろう。また、生徒の心が揺れ動くスピードも速い。諸活動をするときに感じるストレスも大きいであろう。その時、その場面の気持ちをつかむ努力をおこたってはならないということがわかった。ストレスを感じたときに温かい雰囲気を受けとめてくれる集団があったら心強い支えとなるだろう。そのような集団づくりに努めなければならないと同時に、自分自身も心のゆとり、広い心を持つことが温かい学級、温かい学校の風土づくりにつながっていくのではないだろうか。

本校では2年連続で特別研修員が教育相談の研究を行ってきた。ピア・サポートの下地は完成されたと思われる。今後「ほっとルーム」をどのように継続・発展させていくかが課題である。

#### 提言

- 教科の授業にもピア・サポートを取り入れてみたらどうでしょうか。
- ・ 伝え合う力が育成され学力向上にもつながります。  
毎日接しているからこそ逆に気持ちの変化に気付かないことが多い。
- ・ ピア・サポート活動は生徒の新たな一面に気付かせてくれます。  
高原学校など学校行事を新たな関わりをつくるチャンスに。
- ・ 体験活動は助け合う活動をより深く生徒の心に印象づけます。  
教師同士も小さな助け合い。
- ・ 忙しそうにしていたら、ちょっと助けてあげる。ほんの少しの助け合う気持ちが組織を機能しやすいものにします。

#### <主な引用・参考文献>

- ・ 群馬県総合教育センター 『不登校問題課題解決支援資料』(2004)
- ・ 中野 武房・日野 宜千・森川 澄雄 編著 『学校でのピア・サポートのすべて』  
ほんの森出版(2002)
- ・ 小川 康弘 『ピア・サポート活動』(2003)
- ・ 皆川 興栄 『ライフスキル・ワークショップ』 明治図書(2002)